

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第164号

一幼、小、特別支援学校対象一
平成23年10月発行

言葉を育む指導・支援の在り方

「言葉が遅れている」、「話す人の言葉は理解できているようだが、言葉が増えない」、「言葉が不明りょうで聞き取れない」など、言葉の発達に関する相談を受けることが度々ある。

言葉の獲得に遅れがあるために、周りの人との言葉によるコミュニケーションがうまくとれないケースも見られるようである。しかし、言葉の獲得に課題があるからといって、言葉を教え込んだり、無理に言わせようとしていたりしても効果があるとは限らない。

そこで本稿では、言葉の獲得に課題のある幼児児童生徒に、学習場面において、教師がどのようなかわり方をすればよいか、具体的な指導・支援の在り方について述べる。

1 言葉の育ち

言葉を獲得するためには、社会性の発達と認知能力の発達が必要とされている。

¹⁾ 岡本(1982)は、「言葉は発達の中から生まれ、更なるその発達そのものを大きく変えていくものだ」と述べている。幼児児童生徒の表出する言葉が少なく、言葉の発達が遅れていると考えられる場合、言葉の指導だけに集中するのではなく、次に示すような言葉の表出のために必要な力などが育っているか

を確認することが大切である。

- ・ 声を聞き分けることができる（聞こえの発達）。
- ・ 大人と気持ちを共有でき、同じものを見ることができる。
- ・ 動作の模倣、言葉の模倣ができる。
- ・ 話し掛けられている内容が分かる。
- ・ 手や指を器用に動かすことができる。
- ・ 指差しができる。
- ・ やりとり遊びができる。
- ・ 動作や表情で気持ちを表すことができる。
など

言葉の獲得には、身体の発達等が大きく関係する。これを分かりやすく示したものが図1の「ことばのビル」であり、脳の仕組みと言葉の発達を関連付けた概念図である。1・2段目の「身体の脳」は、脳幹という身体の動きや生命の働きに関する部分である。3段目の「心の脳」は、心の働きに関する大脳辺縁系、4段目以上の「知力・言語の脳」は、知力や言葉を働かせる大脳皮質を示している。

また、「嚙む」、「飲み込む」、「なめる」、「吸う」など、飲食物を食べたり、飲んだりするときの口の動きは、言葉の発声を構成する口唇の開け方、舌の動き、息の強弱などの言葉の構音機能につながっている。図1から分かるように、言葉は、身体的、感覚的、心理的、情緒的機能から総合的・複合的に生み出されるものである。

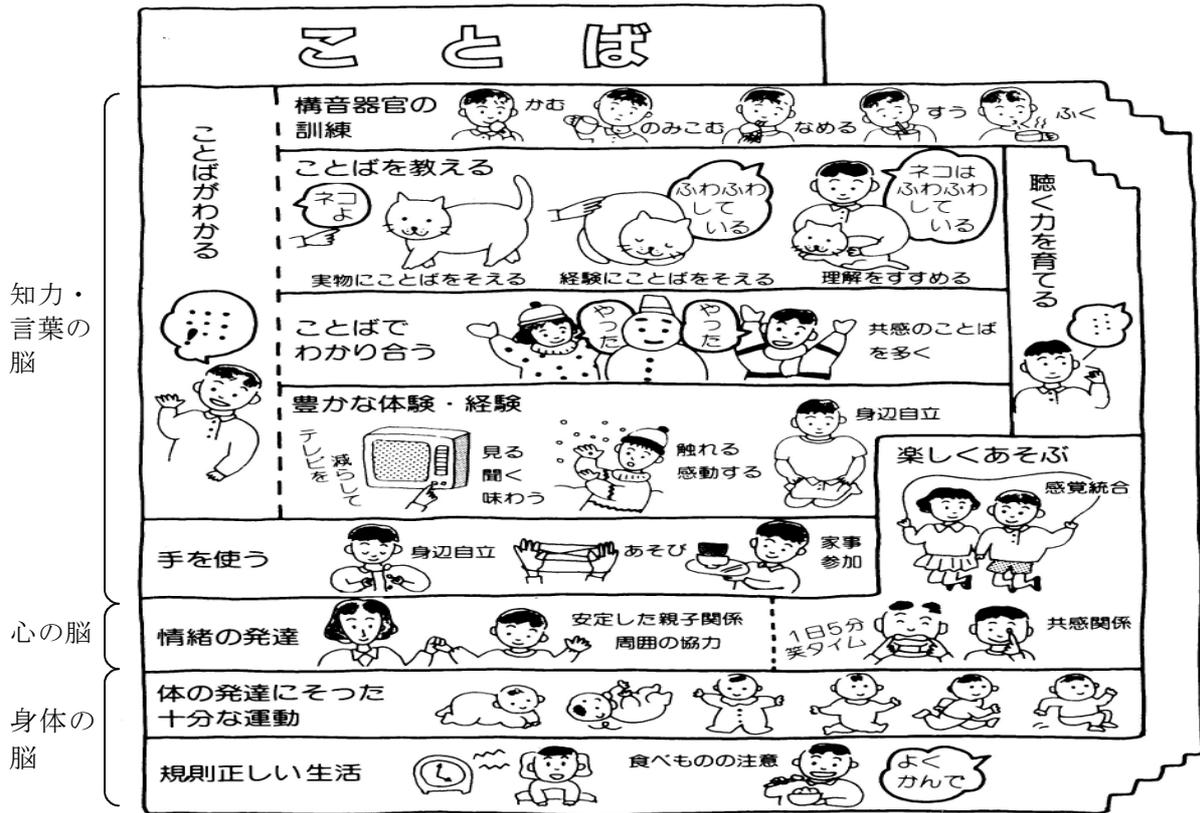


図1 脳の仕組みと言葉の発達を関連付けた「ことばのビル」²⁾

このような点を踏まえ、言葉の指導のための一つの方法として、遊びを通じた指導が考えられる。

要になる。

- ・ 見ること
- ・ 触れること
- ・ 行動すること
- ・ 考えること
- ・ 手、足、身体を動かすこと
- ・ 聞くこと
- ・ 要求すること
- ・ 他人と交わること

2 言葉を育む遊びとのかかわり

遊びは、幼児児童生徒の心身の発達を促す活動であり、言葉の獲得に有効である。また、遊びは幼児児童生徒が主体的に活動できるものでもある。

このような活動は、幼児児童生徒が遊びの中で取り組むことのできる内容である。表1は、遊びを通して発達する能力を示したものである。教師が、幼児児童生徒の行動を読み取り、それを言語化したり、理解できる言葉掛けをしたりするかわりは、様々な感覚器官を刺激することになる。このことが心身の

(1) 心身の発達と遊び

幼児児童生徒の言葉の発達を促すには、次に示す活動を多く経験させることが必

表1 遊びと発達の例³⁾

分類	遊びの例	関連する行動	主に発達する能力
感覚遊び	ガラガラ、紙破り、だるま	見る、聞く、触る、なめる	感覚、ものの理解
受容遊び	オルゴール、絵本、人形劇、テレビ	見る、聞く、想像する、考える	感覚、想像力、言語
ごっこ遊び	人形、ぬいぐるみ、ままごと	身近の生活をまねる、想像する	想像力、生活の理解
運動遊び	カタカタ、ボール、三輪車、自転車	身体全体を動かす	運動能力
構成遊び	積み木、ブロック、粘土、砂遊び、工作	自分で考え工夫する	想像力、構成力
集団遊び	ゲーム、スポーツ	ルールを守りながら競い合う	社会性

遊びの内容の高まり

発達や言葉の獲得につながっていくのである。さらに、その際、現在の発達レベルに応じた遊びを十分に考慮しながら、徐々に内容を高めていくことが大切になる。また、発声・発語に課題のある幼児児童生徒の指導では、自分の息を意識するため、シャボン玉や巻き笛、玉吹き、紙風船などの息を吹く遊びを通して指導する例もある。

(2) 望ましい教師のかかわり方

幼児児童生徒は言葉を獲得し、言葉でのやりとりが可能になる前に、表情や視線、発声、身振りなどで自分の気持ちを表現している。そして、表出されるこれらの情報を教師が読み取ることにより、コミュニケーションは成立している。このことから、教師が幼児児童生徒とかかわる際に心掛けたい主な留意点を次に挙げる。

- ・ どこまで自分でできるのか 実態を的確に把握し、受容すること。
- ・ 現在、友達や玩具などに関心を示さなくても、友達や玩具のある環境や機会を与えること。
- ・ 最初の段階では、受動的に取り組む活動に誘い、受身的でも身体的・心理的な快感を経験させること。
- ・ 現在の興味や能力に適した遊びや活動を、教師も共に楽しむこと。
- ・ 少し高いレベルの活動を展開し、時々軽く誘い掛けること。
- ・ 共に活動する場面の中で、必要な言葉掛けを行うこと。
- ・ 色、形、音、リズム、動き、感触など、興味や注意を引くような刺激特性のある遊具や遊び、活動を工夫して与えること。
- ・ 活動場面での反応をよく観察するとともに、小さな反応も見逃さないようにし、それを指導の手掛かりにすること。
- ・ 好ましい反応を見逃さずにほめたり、励ましたりすること。

3 実践例

言葉の獲得には、教師が、幼児児童生徒の特性を把握し、かかわり方を意識しながら、意図的に言葉掛けをすることが必要とされる。

そこで、言葉の獲得を意識した指導実践例を次に示す。

(1) 実態

A児は幼稚園に在籍する5歳児である。言葉の獲得については、遅れがみられるが、教師など周りの大人とのつながりにも徐々に興味を示し始めている。

(2) 指導目標

A児の理解できる言葉を確実に増やし、相手とかかわろうとする意欲や態度を育てる。

(3) 指導の経過

3か年の指導の経過を表2に示す。

(4) 成果

A児への指導においては、表情や視線、身振りなどわずかではあるが、自ら表出する反応を確実に把握することに努めた。これは、教師主導の指導に比べると時間は掛かるが、A児の相手に伝えたいという気持ちや心情を育てるには最善かつ確実な指導であった。

A児への指導を通して、実態を十分に見極め、可能性のある部分を伸ばしながら、全体の発達につないでいくことの重要性を改めて知ることができた。

現在、表出言語の語い数は多くはないが、登下校時に教師の顔を見て、「おはようございます」、「さようなら」

表2 3か年の指導の経過

	指導・支援の方針	コミュニケーションの状況等
一 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・ A児の好きな遊び(本読みや玩具を使った遊び)に必ず寄り添うことにより、共感関係の成立を図る。 ・ A児の表情などを読み取り、「太鼓の音が聞こえたね」、「大きな犬が来たね」、「びっくりしたね」など、その様子を言葉で表現できるようにする。 ・ 運動遊びを多く取り入れ、体力の向上を図る。 ・ 身体の模倣遊びを取り入れ、自分の身体のイメージをもたせ、認知力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 快適な状態のとき「ンンン」という一定のリズムのある発声のみられ、教師がその声をまねると喜び、自分の発声をフィードバックしている。 ・ 教師に何か伝えたいときは、教師の顔を見ることができるようになってきた。 ・ イントネーションやリズムをはっきりさせることにより、場に応じた言葉のいくつかが聴覚を通して理解できる。 ・ 「オー(おはよう)」と頭を下げるしぐさをするなどし、はっきりとした発声ではないが、目的のある発声が多くみられ、相手の顔を見て口形の模倣を盛んにする。
二 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共感関係の成立を基礎に、生活場面で使われる言葉を聞いて理解できるようにする。 ・ 母親や教師の言葉掛けの内容に応じた行動ができるようにする。 ・ 言葉掛けをする教師の口元を注視することを促し、唇の形や言葉を模倣させる。 ・ 発声の促しは急がず、自分の声を意識して聞く感覚を育てる。 ・ 母親や教師など、かかわる人との情報を共有できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「まって」、「あとで」など、理解している言葉であれば、1回で聞き取ることができる。 ・ 「オーオー」等と呼び掛け、絵日記や写真、身振りを使いながら、A児からの訴えがみられるようになり、コミュニケーションをしようとする意欲が出てくる。 ・ 「ママ、パパ、マンマ、だめ」など、2・3音節の言葉を使い始めるが、指導場面で発声を促すと意図的発声はできない。
三 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話合いの中で、聞いて分かる部分に応答したり、意思表示したりすることができるようにする。 ・ 疑問詞を使った簡単な質問に応答ができるようにする。 ・ 生活言語(あいさつや簡単な日常会話のやりとりなど)の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活音や音声への反応がよく、聞き取る力を基礎として言葉の獲得が可能になってきている。A児も言葉が容易なコミュニケーション手段であることへの見通しがもてるようになってきている。 ・ 身体運動機能が著しく向上する。 ・ 少しずつ言葉で考える場を設定したことから、自分で表現できる力がついてきている。

と、確実に習得した言葉については明りよ
うな発声や的確なやりとりがみられる。
また、母親や教師をはじめ、友達とのコミュ
ニケーションも徐々に成立してきている。
A児の言いたいことを受け止め、共感す
るという環境作りや細かな実態把握は、今
後とも続けていかなければならない。

A児は、自分の言葉で考え、相手に伝
えることが確実にできるようになりつつ
ある。これは、今後のコミュニケーション
活動を活発にするための意欲や表現力
の原動力になると考えられる。

幼児児童生徒の内言語が音声となり、表出さ
れるためには、心身の発達や概念、思考の蓄積が
必要となる。学校等での生活の中で、いろいろな
体験をする際には、教師が寄り添い、具体的で
分かりやすい言葉を添え、幼児児童生徒の表
出している意図を的確に把握することが、言
葉を獲得する確実な方法となる。

－引用・参考文献－

- 1) 岡本夏木著『子どもとことば』昭和57年 岩波書店
 - 2) 中川信子著『ことばの遅い子』平成11年 ぶどう社
 - 3) 一番ヶ瀬康子著『家庭総合』平成15年 一橋出版
- 松坂清俊著『ことばの育て方』昭和62年 日本文化科学社
○ 文部省『聴覚障害教育の手引き』平成7年 海文堂出版

(特別支援教育研修課)